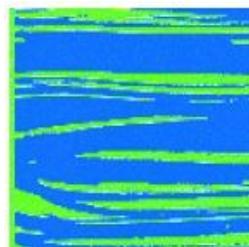


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2009年 冬号 No.57 (2010年3月11日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 藤 健一
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会第28回年次大会のご案内…………… 大会準備委員会 吉野俊彦・榎藤真織
事務局から…………… 事務局
2010年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」応募締切迫る… 広報委員会
連載:いま、こんな研究しています(9)…………… 恒松 伸
自著を語る『意思決定と経済の心理学』…………… 坂上貴之
自著を語る『発達障害のある人と楽しく学習—好みを生かした指導—』…………… 松下浩之
連載:海外で学ぶ学生、海外で働く専門職(4)…………… 矢吹華絵
編集後記…………… ニューズレター編集部

日本行動分析学会第28回年次大会のご案内

日本行動分析学会第28回大会年次大会準備委員会
吉野俊彦・榎藤真織
(神戸親和女子大学発達教育学部)

2010年度の年次大会を神戸親和女子大学で開催させていただくことになりました。例年の大会は7月から遅くとも9月初旬に開催されてきましたが、諸般の事情から今年度は10月9・10日(土・日)という比較的遅い時期となりました。そのため、ご案内が遅くなり、会員の皆様には、ご心配とご迷惑をおかけしてしまい申し訳なく感じております。

さて、本年度の大会での現在準備中の企画をご案内します。まず、大会開催に合わせて、近年注目されて

いる機軸行動発達支援法(PRT)の Koegel 先生(UCSB)を招待することが決まりました。現在、ご夫妻での来日が可能かどうか検討中ですが、大会初日に Lynn 先生にワークショップを開いていただくようお願いしております。また、「応用行動分析療育家の養成」と「人を対象にした実験的研究、あるいは臨床活動にかかわる倫理的課題」についてのシンポジウム開催のご提案もいただいております。さらに、近年の大会ではポスター発表のみでの開催が多くなっていますが、

今年度は口頭発表のセッションを復活させる予定です。大会とは独立させて、11日(月・祝)に新しい企画での教育セッションも準備中です。

3月上旬には大会のホームページ(<http://www.kobe-shinwa.ac.jp/j-aba2010/index.html>)を開き、第1号通信を送付予定です。大会へのご参加・ご発表などの申し込み締め切り、教育セッションや懇親会のご案内については、ホームページと第1号通信でご連絡いたします。

神戸親和女子大学は、一般に知られている海や港町

という神戸のイメージと異なり、六甲の山並みの北側に位置する小さな大学です。スタッフの数も限られているために、年次大会企画委員でもある、関西学院大学の中島定彦先生のアドバイスや人的援助もいただきながら、何とか例年の大会の水準を維持できればと考えています。

10月の神戸は比較的気候のよい時期です。数多くの会員の先生にご参加いただけますようお願い申し上げます。

日本行動分析学会 第28回年次大会

大会

会 期: 2010年10月9,10日(土,日)
会 場: 神戸親和女子大学 鈴蘭台キャンパス
(神戸市北区鈴蘭台北町7-13-1)

懇親会

会 場: ホテル北野プラザ六甲荘 10月9日(土) 18:30~(予定)
(神戸市中央区北野町1-1-14)
大会会場より送迎バスで25分

教育セッション

日 時: 2010年10月11日(月・祝) 午前
会 場: 調 整 中
テ ー マ: あの先生の行動分析学の授業が聴きたい!!

事務局から

学会事務については、2009年4月より、その一部をリファレンスに委託しております。これまで、事務を引き受けておりました私どもはぜひふんと仕事量が軽減されましたが、業務の質自体もレベルアップした感があります。そこで、このたび、会員数や会費納入率といった行動の所産をもとに、業務委託の効果を検証してみることにしました。

1. 会員数の把握

図1に、2007～2009年度の会員数の推移を示しました。委託前は、会員登録・変更の処理に時間がかかり、会員数の増減を数ヶ月遅れてしか追えませんでした。委託後は、この問題が解消されたほか、管理対象から適宜、連絡先不明の会員（いわゆる幽霊会員）を外すことも可能になり、実態に即した会員の把握ができるようになりました。

3年度（以上）会費を未納した場合の自然退会候補者についても、2008年度は115名が該当しましたが、2009年度は10月時点で49名にまで減少しています。

2. 会費

1) 会費納入の促進

図2に、2007～2009年度の会費納入率の推移を示しました。委託前と比べて、委託後は12月時点で会費納入率が約18.3%上回っています。上昇の理由について、これまで12月に1回のみ実施していた督促を、今年度は6月、9月、11月に3回実施しており、督促の効果があつたものと思われます。特に、1回目の督促後の伸びが大きく、最初の会費請求からの間隔が短いことや、「学会誌の同封あり」という条件が納入を促した可能性が考えられます。

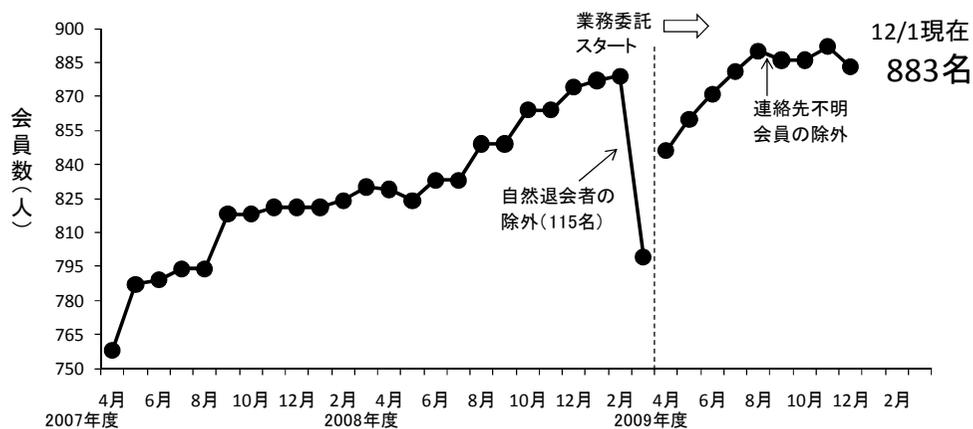


図1 2007～2009年度の月ごとの会員数

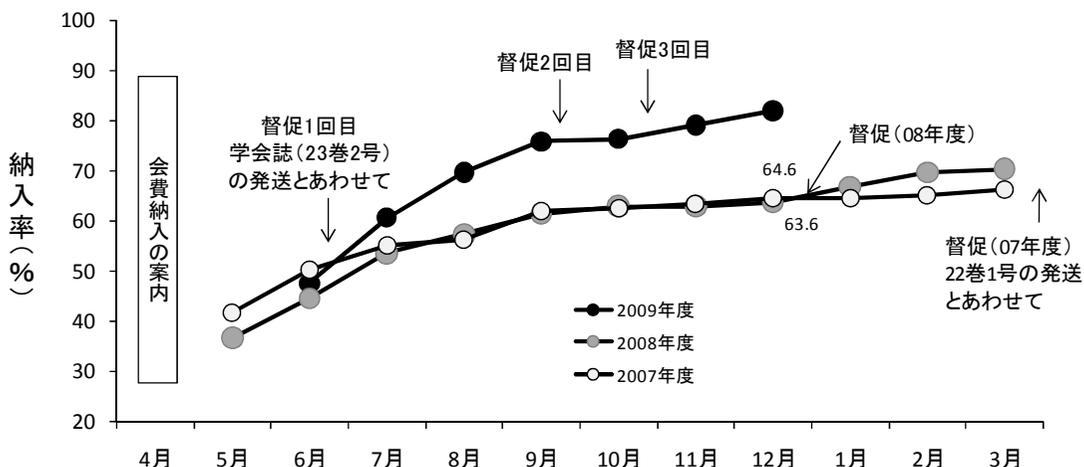


図2 2007～2009年度の月ごとの会費納入率

2) 未納会費の回収

図3に会費未収金の累積額を示しました。委託開始前(2008年度時点)の会費未収金の累積額は計471万円でした。それに対して、今年度は12月時点で未収金の累積額が177万円にまで減少し、①自然退会者の整理と、②3回の督促が未収金の減少につながったと思われます。なお、8月～9月にかけて複数年滞納者の納入が大きく増えましたが、その理由は不明です。

3) 会員種別ごとの納入率

図4に会員種別ごとの納入率の推移を示しました。賛助、一般、夫婦会員に比べて、学生、購読会員の納入率が低く、検討の余地が示唆されます。

以上、業務委託により、会員の实態をよりの確に把握できるようになり、会費納入率も上昇したと考えて良いと思います。

もとより、日本行動分析学会は会員のみなさまの会費によって運営されておりますので、もし年度会費の納入がまだの会員の方がいらっし

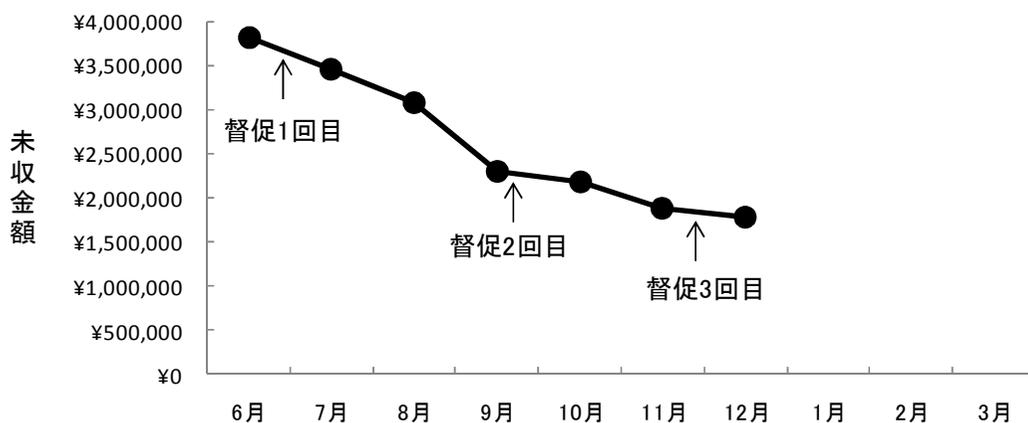


図3 月ごとの会費未収金の累積額

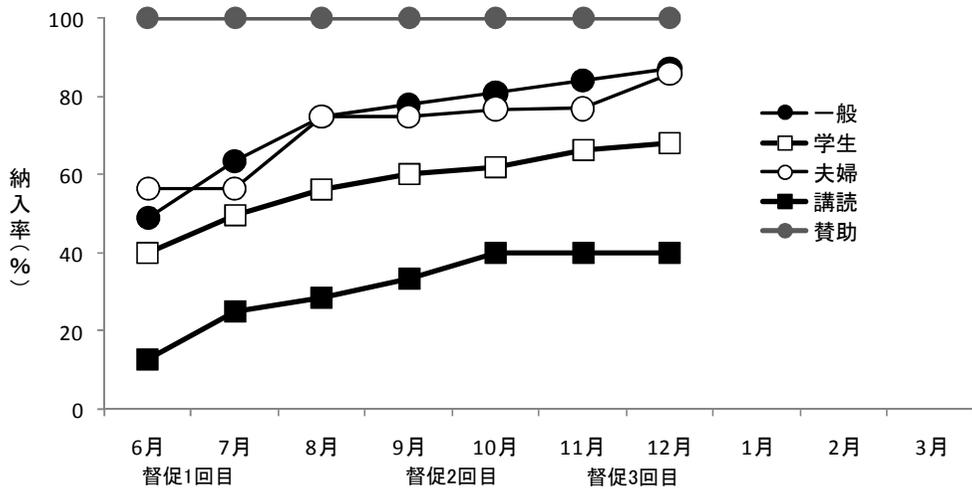


図4 2009年度会費の会員種別ごとの納入率

やいましたら、是非とも納入してくださいませ
ようお願いいたします。

(以上、データの整理と作図はリファレンス(委

託先)の川原氏の協力を得、事務局員の吉岡が
行いました。文章は主に吉岡が書き、部分的に
大河内事務局長が加筆しました。)

2010年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に 対する助成事業」応募締切迫る(3月31日消印有効)

広報委員会

応募資格は下記の通りです。学会ホームページ並びにJ-ABA ニュース 55号(2009年夏号)に応募要項と申請書類を掲載していますので、ご参照の上、奮ってご応募ください。

<応募資格>

1. 2010年5月に米国サンアントニオで開催されるABAI またはSQAB に発表を申込んだ者。
 2. 発表の種別は、口頭発表、ポスター発表、シンポジウムのスピーカー、パネルディスカッションのスピーカー、のいずれかであること。
- また、口頭発表、ポスター発表では、第一発表者であること。ビジネス・ミーティング、ABAI

Expo、同窓会(reunion)、ワークショップのみの参加者は応募できない。

3. 2009年4月1日に、日本行動分析学会の学生会員として登録されている者で、ABAI/SQAB参加に対して他の資金援助を受けていない者。ただし、SABAが募集する学生発表者の大会参加費免除への同時応募は認められる。
4. 申請時に日本国内に居住していること。
5. 過去にこの事業による助成を受けていない者。

<連載：いま、こんな研究しています (9)>

恒松 伸

(立命館大学・非常勤講師)

読者の皆さん、こんにちは。私は、関西地区の大学で非常勤講師をしている恒松です。昨年の8月に母校の立命館大学で開催された日本心理学会のシンポジウム「行動分析学における動物研究の役割と期待」で、話題を提供して頂いた広報委員の青山謙二郎先生より、突然のご依頼があり、今回の連載を担当させて頂くことになりました。実力不足・勉強不足ゆえに、お断りしようとも思いましたが、しばらくの間、お付き合い頂ければ幸いです。

私は、これまで、個体の消費や選択の問題について、行動経済学的な観点から関心を寄せてきました（例えば、恒松，2009）が、今日は、消費の基礎となる選好（preference）の獲得の1つのタイプについて、話題を提供させて頂きたいと思います。その前に、まずは問題です。レスポナント条件づけに関する以下の2つの問題文の内容は正しいでしょうか。それとも、間違っているでしょうか。「○」か「×」かで、お答えください。

(1) レスポナント条件づけにもとづく学習が成立するためには、中性刺激（NS）は必ず無条件刺激（US）と対提示されなければならない。

(2) 刺激の好ましきは、すべてオペラント条件づけによって獲得され、レスポナント条件づけによって獲得されることはない。

今や、行動分析学・行動心理学の研究者・学生の必読書ともいえる小野浩一先生著の「行動の基礎」によると、(1)、(2)の問いの答えは、いずれも「×」となりますが、皆さんは正解でしたでしょうか。この著書において、レスポナント条件づけとは、「2つの刺激を時間的に前後させて提示する」ことであり、この手続き的定義にしたがうと、(1)でNSと組み合わせられる刺激は、US以外の刺激、例えば、CS1やCS2などの条件刺激でもよいこととなります。また、(2)に関して、刺激の選好は、少なくともNSに対する単純接触、レスポナント条件づけ、オペラント条件づけの3種類の手続きで獲得されると考えられています（例えば、De Houwer, 2007）が、なかでもレスポナント条件づけによって、刺激の選好が変化する現象は、評価条件づけ（evaluative conditioning）と呼ばれています。

De Houwer, Thomas, and Baeyens (2001)によると、評価条件づけは、ヒトの商品の消費行動の基礎となる選好の獲得に重大な影響を及ぼす条件づけとされますが、現在、私が取り組んでいるテーマの1つは、この条件づけの一種である言語レスポナント条件づけによる評価反応の獲得と仮想の清涼飲料水への転移の問題です。ここで、言語レスポナント条件づけは、

1) 単独で評価反応を誘発する CS1 として Staats and Staats (1957) が用いた正や負の単語（例えば、正の単語として gift などを、負の単語として sad などを）を用いること、2) 条件づけ試行において、彼らが開発した対提示手続き（以下、Staats タイプ手続き）を用いること、3) 条件づけ試行の終了後に、先に正・負の単語と対提示された無意味綴り（YOF や XEH など）の単独提示を行い、その評価反応の程度を SD 尺度（最も好ましいから、最も好ましくないまでの 7 段階評価）で検出することの 3 点を特徴とします。Staats タイプ手続きでは、条件づけの各試行において、無意味綴り（NS）と単語（CS1）が、順に、視覚提示、聴覚提示された直後に、参加者に同じ単語の言語表出（オペラント行動）を求めることから、エコーイックつきの対提示手続きといえるかもしれません。

Staats タイプ手続きを用いたこれまでの実証研究（例えば、Staats & Staats, 1957; Tryon & Cicero, 1989）より、無意味綴りに対して、正・負の評価反応が獲得される事実が確認されてきましたが、現在、私は、この手続きにおける単語の表出の機能や、獲得された評価反応がはたして仮想の清涼飲料水の選好に転移するかといった問題に取り組んでいます。後者の転移の問題では、複数の紙コップのそれぞれに、条件づけ試行で使用された無意味綴りが 1 つずつ印字された絵刺激を用い、参加者に、飲みたいもの順に順位をつけてもらう課題を使用しています。SD 尺度では、個々の無意味綴りに対する絶対的な選好を調べているのに対し、転移の課題では、より日常的な文脈のなかで、複数の無意味綴り

間の相対的な選好を調べているといえるでしょう。私たちの消費行動場面では、しばしば、単一ではなく複数の商品が同時に存在することから、参加者に相対的な評価を求めることは重要な課題であると思われます。

例えば、大学生を対象とした恒松・中前(2008)の報告では、エコーイックつきの対提示群とテクスチュアルつきの対提示群を設け、評価反応の獲得と仮想の清涼飲料水への転移を調べました。ここで、テクスチュアルつきの対提示とは、無意味綴り（NS）と同様に、単語（CS1）も視覚提示し、同じ単語の音声表出を求める手続きのことです。また、この研究では、これまでの Staats タイプ手続きの研究と同様に、CS1 として、正、負に加え中立の単語も用いられました。見る、聞く、表出する、をすべて合計した言語化 (verbalization) の回数の観点から、両群は、同じ結果になると予想されましたが、統計分析の結果、(a) エコーイックつきの対提示群では、正、中立、負の完全な条件づけが成立したのに対し、テクスチュアルつきの対提示群では、部分的な条件づけの成立にとどまることが、また、(b) 前者の対提示群のみで、正に条件づけられた無意味綴りの清涼飲料水が最も好まれ、逆に、負に条件づけられた無意味綴りの清涼飲料水が最も好まれなことが示されました。

恒松・中前(2008)の結果は、通常の評価条件づけ研究とは異なり、Staats タイプ手続きを用いた研究では、なぜ単語が視覚ではなく聴覚提示されてきたのか。また、参加者に単語の言語表出を求めたのはなぜかについて、新たな疑問を生み出しました。現在は、言語表出を求め

ない対提示のみの条件を含め、刺激や手続きなどを改善しながら、評価反応の獲得と清涼飲料水への転移の問題について、より信頼性と妥当性の高いデータを生み出すためのさまざまな実験条件を探索しているところです。今後、年次大会等を通じて、逐次、報告させて頂く予定でありますので、その節は、読者の皆さん方に、いろいろとご教示、ご助言を頂ければ幸いに存じます。

最後まで、拙稿にお付き合い頂き有難うございました。また、今回、寄稿の機会を与えて頂いたニューズレター編集部の方々に、この場を借りて、感謝申し上げます。

引用文献

- De Houwer, J. (2007). A conceptual and theoretical analysis of evaluative conditioning. *The Spanish Journal of Psychology*, 10, 230-241.
- De Houwer, J., Thomas, S., & Baeyens, F. (2001). Associative learning of likes and dislikes: A review of 25 years of research on human evaluative conditioning. *Psychological Bulletin*, 127, 853-869.
- 小野浩一. (2005). 行動の基礎 豊かな人間理解のために. 培風館
- Staats, C. K., & Staats, A. W. (1957). Meaning established by classical conditioning. *Journal of Experimental Psychology*, 54, 74-80.
- Tryon, W. W., & Cicero, S. D. (1989). Classical conditioning of meaning -I. A replication and higher-order extension. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 20, 137-142.
- 恒松 伸. (2009). 需要関数を使う 坂上貴之 (編) 意思決定と経済の心理学. 朝倉書店, 30-52.
- 恒松 伸・中前太一. (2008). 言語レスポント条件づけと仮想清涼飲料水への選好の転移 -Staats タイプ手続きとその変化手続きの比較- 日本行動分析学会第26回年次大会発表論文集, 83.

自著を語る

『朝倉実践心理学講座 1 意思決定と経済の心理学』

坂上貴之

(慶應義塾大学)

2009年11月に上梓したこの本は、実践心理学講座というシリーズの一冊である。最近、注目を浴びるようになってきた心理学と経済学との共同領域、行動経済学と行動的意思決定理論を基盤とした学問的成果を実践場面に関係付けて紹介することが、この本の目的である。

この共同領域の特徴を表すキーワードは、価値と不確実性である。実践心理学という言葉にふさわしいものとするべく、それぞれを具体的に測定したり検討したりする手段を、第1部と第2部に据えた。第3部ではこうした手段にもとづいて蓄積されてきた知見から、判断、意思決定、選択といった行為をどのように考えていくことが出来るのかを展開した。

この本の特徴の1つは、実験による知の集積「実験知」に力点を置いたところにある。今や経済学だけでなく、政治学、法学などの多くの社会科学が、各領域の伝統的な方法論の他に、実験的な手法を取り入れた新しい方法を模索している。行動経済学や行動的意思決定理論の発展は、疑いもなく、こうした社会科学の実験知への注目に力を貸したと言える。行動分析学は、ヒトを含む個体の行動を、その環境との随伴性に着目しながら、実験的に分析することをその重要な方法論の1つとしている。特に選択行動という研究領域での実験的研究の成果は、その

まま経済学や生物学での研究結果と比較され、使われた手続きがそれらの分野で利用されてきた。

この本のもう1つの特徴は、心理学の他の領域の研究者との共同作業である。認知心理学の世界で育まれてきた意思決定理論は、TverskyとKahnemanによるプロスペクト理論の提唱という形で、これまで合理的な意思決定や選択を規範に据えて研究を進めてきた経済学的な選択の理論に大きな衝撃を与えた。しかしその提唱に至るまでの段階で、すでに多くの合理的選択理論からの逸脱例が集積され、実験的再現や測定に基づく関数関係が示されてきたのである。本書では、こうした反例や関数関係の集積に関わってきた行動分析学、認知心理学、実験経済学の研究者たちが登場する。

判断、意思決定、選択という行動場面を心理学や経済学がどのように対象化してきたのか、またどんな新しい展開が期待されるのか、という疑問に本書は答えようとしており、またそのような疑問を持つ読者を想定している。しかし行動分析学に関わる著者によって書かれた章に割り振られたスペースは、決して少ないものではない。マッチング、遅延割引、需要関数、変化抵抗、随伴性判断、こうしたトピックスの多くは、行動分析学の中でも比較的地味な実験的

分野、とりわけ数量的行動分析と呼ばれる分野で続けられてきた。行動分析学に関わる諸氏が、この本から得られる別の利益は、同じ行動分析学の実験的分野での活動を知ること、その実践場面での活用を想像することが出来ることである。

なぜ数量的行動分析学の研究者たちが、上に挙げたようなトピックスに夢中になるであろうか。それは予測の力にある。変動時隔(VI)強化スケジュール30秒と60秒に対して適当な反応率で反応していたならば、それぞれから1時間あたり120個と60個の強化子を受けることができるということは、教科書で学んできたことである。しかしこのVI30”とVI60”とを左と右のキイに設定した場面で、ハトが反応を強化比と同じ2:1に振り分けて、2つのキイから1時間あたり得られる最大量の180個にせまる強化子を得ることを予測できるのが、マッチングの法則である。反応が出現してから、D秒間遅れて餌を与えると、もともとの反応率に比べて大体Dの大きさに反比例して反応率が減少していく。この反比例の関数が遅延割引関数

である。

行動分析学の魅力は、なんといっても行動の予測と制御にある。環境と行動との関数的な関係が、増加や減少といった変化の方向だけでなく、その値までもある程度予測や制御が可能になること、それは行動の実験的数量的分析をしている分野の研究者にとっての大きな魅力である。しかしながら、同時に私たちが知るのが、行動や心理を取り扱う分野でのこうした予測と制御のむつかしさでもある。明らかにされた様々な関数的関係が、現象のごく一部しかまだ説明していないことにも読者は気づくことになる。

この果てしない挑戦に、不可知のニヒリズムを感じ取るのか、それとも未知なるものへの好奇心を感じ取るのか。この本の読後感が是非とも後者につながっていくものであってほしいと編者は願っている。

目次などは以下のページを参照のこと

http://www.molcom.jp/item_detail/48072/

自著を語る

『発達障害のある人と楽しく学習 —好みを生かした指導—』

松下浩之

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

本書は、米国の応用行動分析家である Reid, D. H. 博士と Green, C. W. 博士の著書、「Preference-Based Teaching: Helping People

With Developmental Disabilities Enjoy Learning Without Problem Behavior”の訳書です(二瓶社, 2010年1月刊行)。本書の特筆

すべき事項は、発達障害のある人の学習をいかに楽しいものにするかについて、応用行動分析学 (ABA) の立場から科学的に書かれている点にあります。そしてそれは、タイトルにある通り、その人の「好み」を最大限に活用することで達成できるのです。近年、わが国でも発達障害のある人に対して ABA を用いた支援の方法論が普及しつつあり、多くの書籍が出版されています。しかし、効果的な支援の方法や、家庭や学校で使いやすい方法に関するものに比べて、「楽しい学習」に関して特筆したものはあまり見当たりません。

そもそも、本書の翻訳が始まったのは、私が大学院に入って間もないころでした。記者の一人でゼミの先輩である村本浄司さんから、「この本おもしろそうだよ」と勧められて勉強会を開いたことがきっかけでした。学部生のころから発達障害のある子どもの臨床活動に参加させて頂いていた私は、当時ようやく指導セッションに慣れ始めた初心者であり、セッションのたびに先生や先輩から「ダメ出し」をされていました。手続き通りにプロンプトや強化子を提示しているし、自由時間の遊びは楽しめるのに、指導となると子どもとお互いに緊張してしまい、うまくいかないのです。そんな私にとって、本書は目からウロコの内容ばかりでした。特に、レポートの形成の重要性とその構築方法、指導自体を行動に見立て、三項随伴性と同様のダイアグラムとして提示された ABC モデル、指導者自身の楽しさを増やすことの重要性などが、分かりやすくかつ論理的に書かれており、「そう

いうことか!」と納得できました。レポートの形成は臨床の基本であると言われてますが、なぜ重要なのかということについて触れている教科書はほとんどありません。強化子の提示は ABA の基本中の基本ですが、「好きなもの」と強化子を整理して考え、より「楽しみ」を増やすような強化子の提示方法は見落とされがちです。これらは、現在の私の臨床活動の基礎となっており、発達障害のある子どもとの学習は、子どもから楽しそうな様子が見られ、私にとっても楽しいものになっています。

発達障害のある人の臨床に携わっている人にとって、その人のパフォーマンスの向上はもちろんのこと、その支援や指導がお互いにとって楽しいものになることは、共通の願いであると思います。また、多くの応用行動分析家のみなさんは、すでに効果的で楽しい支援や指導を実施していることと思います。しかし、臨床の初心者の方からエキスパートの方まで、障害のある人と「楽しく」学習するという点について、もう一度考えてみませんか? 本書がそのお役に立てれば幸いです。ぜひお気軽に手に取っていただき、わが国における障害のある人の学習や支援が、全ての人にとってとても楽しいものになることを切に願っています。

(蛇足ですが、「あとがき」の最後に監訳者が次のことを記していることも付け加えておきます。「本書のこの2つのメッセージは、教師や支援者にとってあまりにも基本的なことであり、すでにこのことを習得している人たちは、本書を読む必要はありません。」)

<連載：海外で学ぶ学生、海外で働く専門職 (4)>

私のアメリカ体験記：人生何が起こるか わからないものです

矢吹華絵

(SEEK Education, Inc.)

1. 軽い気持ちでの留学

小さな頃からの学校の先生になりたいという夢に向かって、大学で英文科に進み、中高の英語の教員資格を取っていた大学四年の時、ふと、自分は英語を話したり聞いたりすることも出来ないのに、先生になっていいのだろうか、という疑問にぶち当たりました。学校の成績は悪くなかったものの、実際に英語を使うような授業では、自分の英語力をまざまざと見せ付けられていたのです。ちょうどその頃、日本では子供たちの自殺という問題が社会的に大きく取り上げられていて、もともと心理学に興味があった私は、アメリカに行って心理学を勉強すれば、英語も学べるし一石二鳥なのでは、という甘い気持ちで、留学を決意しました。調べたところ、アメリカではスクールサイコロジストや、スクールカウンセラーという職業があるということで、二、三年かけて修士号を取って帰ってくるという約束で親を説き伏せ、1994年の夏、ロサンゼルス近郊の California State University, Northridge 付属の ESL (English as a Second Language) に留学しました。まだこの大学院から受け入れてられたわけでもなく、誰を知っているわけでもなく、まあ行ってしまえば英語も上達し何とかなるだろうという、今考えれば、若さゆえの勢いだけでの渡米でした。

2. 英語の壁

さて、こちらに来たものの、英語はなかなか上達せず、TOEFL を何度受けても、考えていた大学院に申請するスコアには足りませんでした。ESL で九ヶ月勉強したり、UCLA Extension で第二外国語としての英語教育の認定証を取りつつスコアを上げ、学校を探しました。ついに渡米から三年目、その頃住んでいた所から近かった California State University, Los Angeles での心理学修士課程の面接までこぎつけました。しかし面接では、英語力が足りない上に、心理学を勉強したことがないということで、大学レベルから始めるようにと言われてしまいました。大学に入りなおし、授業を取り始めたものの、心理学の学士号を取るには、一般教養も含めて丸四年ほど、そして私の英語力を含めるとそれ以上かかるという状況でした。始めの頃は授業にもなかなかついていけず、次の数年は本当に大変で、何度も学校を辞めようと思いました。心理学に関する授業だけは、必死に勉強し、いい成績を保っていましたが、自分は本当に何をしたいのかよくわからなくなっていました。

3. 運命の出会い

卒業までやっと後一年ほどとなり、漠然とそのまま同じ大学の心理学修士課程に進もうかと思っていた2000年の春、心理学の歴史のよ

うなクラスを必修として取りました。クラスに入ってきた白髪頭で気難しそうな、今まで見たことのない教授は、初めてのクラスの全ての時間を、Traditional Psychology と Radical Behaviorism の違いの説明に費やし、最後に、「もし本当に何かを変えたいなら、心理学ではなく、行動分析を勉強すべきだ」と、心理学専攻の八十人ほどの学生を前に、本当に熱く語ったのです。クラスが反発の雰囲気包まれる中、私は、何がなんだか分からないけど、これこそ自分が勉強したいものだ、となぜか一緒に熱くなってしまう、いつもは内気な私が、どうすれば行動分析が勉強できるのかを、すぐに教授に聞きに行きました。教授は、自分が行動分析の修士号のコースを教えていて、9月から始まる次のグループにまだ空きがあるから、もう締め切りは過ぎていますが、なんとか学部と掛け合せて入れてあげようと言ってくださいました。これが私が今でも運命と感謝する、純粋なスキナリアンであり、ジョイントコントロールで有名な Barry Lowenkron 先生、そして行動分析との出会いでした。実はこれには裏話がありまして、この場をお借りして、佐藤方哉先生に、今までお伝えする機会がなかったお礼を言わせて頂きたいと思います。このクラスの数日後、初めて Lowenkron 先生の研究室にお邪魔した時、私が日本人だと知ると、先生は少し興奮されながら、国際行動分析学会の会長は最近まで日本人だったのだと言われ、紙に Masaya Sato と書かれて知っているかと聞かれました。全く行動分析に無知であった私が知らないと言えど(本当に申し訳ありません)、将来日本に帰るとしたら、連絡を取ったほうがいいと言われ、今まで留学生は卒業できたことのない厳しい二年間のプログ

ラムになるけれども、日本でもどんどん行動分析が伸びているということの代表として頑張れ、と言ってくださったのです。無事に2000年の9月から、California State University, Los Angeles の心理学行動分析専攻の修士号が始まりました。

4. 苦闘の大学院時代

大学院のクラスが始まってみると、クラスメートは全て、すでにこの分野で、特に自閉症の分野で働いている人達でした。みんなの会話の中で、簡単に IEP (Individualized Education Plan) や Autism(自閉症)といった言葉が飛び交う中、何も知らない私は授業についていくのに必死でした。大学キャンパスの図書館や日本食レストランでのバイトを掛け持ちして生活費の足しにしながら、英語が出来ない分、みんなの二倍も三倍も努力しようと頑張りました。同じ先生が、同じ授業を週二回教えているときは、一度目はノートを取るため、そしてもう一度は講義に集中するために二度授業に通ったこともありました。一年間、Lowenkron 先生の下で行動分析の基礎を勉強した後、様々な理由で、同じ大学のカウンセリング学部での行動分析科に移り、学校での応用行動分析がご専門の Roy Mayer 先生の下で次の一年間勉強しました。

5. 最初のインターン

大学院の二年目からは、インターンをしなくてははいけません。特に、Board Certified Behavior Analyst (BCBA) の資格が始まったばかりの頃で、Mayer 先生は積極的なサポーターだったこともあり、試験を受けるために必要な項目の一つである、BCBA 保持者の下での九ヶ月間の経

験は、インターン先さえ探してくれば、大学院の先生方がサインをしてくれるという願ってもいない環境でした。一人のクラスメートの誘いを受けて、自閉症児の家庭で、DTT (Discrete Trial Training) を含む ABA (Applied Behavior Analysis) のサービスを提供する会社に、パートタイムのセラピストとして雇ってもらいました。実は、DTTを最初に始められた UCLA のロバース博士のお膝元であるカリフォルニアには、そのような会社が山ほどあります。カリフォルニアでは、ランターマン法 (カリフォルニア州で制定された発達障害者サービス法) の下に Regional Center という発達障害児、者にサービスを提供するシステムが整っていて、5歳以下の子供であれば、比較的簡単に、全て無償で、週に10時間から40時間の ABA のセラピーが受けられるのです (残念ながら、それより大きい子供たちは住んでいる地域によって受けられるサービスに大変差があります)。でも、お金のみを当てにした、行動分析のことをよく知らない Behavior Specialist 達がどんどん出てくるのを心配したカリフォルニアの行動分析学会は、BCBA のシステムをサポートすることにしたという現実もあるのです。それはともかく、無事にトレーニングを終え、いざ初めてみると、その二週間後、英語力の不足やおとなしい性格などを理由に辞めさせられてしまいました。

6. SEEK Education との出会い、そして今

インターンの時間数が終わらなければ、卒業できません。仕事を失ったその日の夜、偶然クラスで会ったクラスメートに相談すると、自分は去年できたばかりの、同じようなサービスを提供している非営利団体のディレクターをし

ているから、まだ小さな会社だけどうちに来ればいいと誘ってくれ、次の週にはトレーニングに参加してパートタイムのセラピストになりました。これが、いまでも働いている SEEK Education, Inc との出会いでした。SEEK Education は、発達障害児をもつ親たちによってつくられた非営利団体で、発達障害児とその家族、そして学校の先生方などに、家庭や学校での DTT を含めた ABA サービスを提供しています。当時は小さなオフィスにコンサルタントが4名ほどの小さな会社でした。始めは英語力不足もあって、クライアントにプログラムを作る時給20ドルのコンサルタントの仕事にはつけないで、時給9ドルの仕事で金銭的には苦勞しましたが、将来のためには直接のセラピーを知りたいという思い、そして何より、生徒たちが変わっていく姿を目の前で見られる喜びで一年間頑張りました。卒業し、無事に BCBA の資格も取り、少しずつコンサルタントとしての仕事も始めましたが、英語力の不足を克服するには、まだまだ時間がかかりました。生徒たちのお母さんや先生方が、私の力を試すように使ってくる難しい英語のフレーズがわからず、セッションの後に泣く事もしょっちゅうありました。暖かく支えてくれた良きスーパーバイザー達に励まされ、時間を気にせず一生懸命働く努力が認められて、2004年には無事にフルタイムのコンサルタントになりました。会社が発展していく中、その後は2006年にマネージャーに昇進し、コンサルタント達をスーパーバイズした後、2009年の終わりに、プログラムディレクターとなり、今ではコンサルタント、セラピストを含めて130人を超えるスタッフ、そして250人を超える2歳から大人までの ABA

のプログラムをスーパーバイズする立場になりました。毎日、みんながやる気を持って、自分たちに出来る最高のサービスを提供できるよう頑張っています。

7. これからアメリカに来られる方へ

私の会社は、障害児を持った親たちによって作られた非営利団体ということもあり、毎年こちらの行動分析で著名な先生方をお連れして、台湾や中国などでトレーニングを行っています。私自身も、5年前の4月には、スキナー先生のお嬢さんである、Julie Vargas 先生、ご主人の Ernest Vargas 先生、世界中に自閉症のクリニックを広げておられる Joseph Morrow 先生、そして Behavior Analyst Certification Board の Gerald Shook 先生をお連れして日本に行き、厚生労働省の方々とお会いしたり、スキナー先生も訪れた犬山の京都大学霊長類研究所を見学させていただき、スキナー先生も泊まったホテルに泊ま

るという旅行に同行させて頂きました。去年の9月には、国際行動分析学会の前会長であるオハイオ州立大学の William Heward 先生、そして杉山尚子先生と共に、東京で Japan Employee Assistance Program (従業員支援制度)主催の ABA のワークショップにもスピーカーとして参加させていただきました。今年は台湾にも行かせて頂きます。毎日の仕事は過労死してしまうのではないかと心配になるほどハードですが、充実しています。アメリカに来た当初、まさか自分が行動分析の世界、それもアメリカに残ってこのような仕事をするようになるとは、夢にも思ってみませんでした。今思うと、自分にあっただのは、飛び込む勇氣、不思議な出会い、必死の努力、そしてそれを支えてくれた両親でした。決してエリートの道を行んだわけではない私の体験記が、これからアメリカに来ようと思っている方々の少しでもお役に立てば幸いです。



SEEKのコンサルタントたち (残念ながら私はいませんが)

編集後記

冬号は2月末の予定が遅れ、ようやく発行に至りました。編集の不手際をお詫びいたします。先日まで本当に春の暖かさでしたが、ここ数日は冬号にふさわしい気候に逆戻りしましたので、冬の間発行されたと思ってお読みいただければ幸いです。今号では年次大会の予告をまず掲載させていただきました。本来ならば、大会のホームページが公開されるよりも先にニュースレターがお手元に届く予定でしたが、遅くなりましたことをお詫びいたします。魅力的なプログラムが用意されておりますので、是非、多くの会員の方にご参加いただきたいと思います。

また、連載の「いま、こんな研究しています」

では恒松伸氏にご寄稿いただきました。かつては動物実験がご専門だった恒松さんの現在の人間を対象とした研究の興味深い話をご紹介します。また同じく連載の「海外で学ぶ学生、海外で働く専門職」には、矢吹華絵氏にご寄稿いただきました。アメリカで行動分析学を学び、さらに専門家として働く矢吹さんの勢いある文章を読めば、同じような道を志す皆さんも勇気づけられると思います。委員会からの報告や自著を語るなど、他にもご執筆いただきました皆様にお礼を申し上げます。

次の本物の「春」号は5月末頃に発行予定で、担当は園山委員になります。(青山)

J-ABA ニュース編集部よりお願い

- ニュースレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内などです。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニュースレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニュースレターに掲載された記事の著

作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで開催します。

- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1

筑波大学障害科学系園山研究室気付

日本行動分析学会ニュースレター編集部

園山 繁樹

E-mail: sonoyama@human.tsukuba.ac.jp